

揺らぐ家父長制

—— 『カスターブリッジの市長』における新たな家族の構図 ——

木原 貴子

A Crisis of Patriarchy : A Picture of the New Family in *The Mayor of Casterbridge*

Takako KIHARA

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の多くの長編小説において、中心となるプロットは主人公たちの恋と結婚の過程であり、そこに描かれる人間関係は、恋人同士の、そして、その延長上にある夫婦の様相である。確かに『カスターブリッジの市長』 (*The Life and Death of The Mayor of Casterbridge: A Story of a Man of Character*, 以下 MC と省略) においても、ルセッタ (Lucetta Templeman) を巡る、ヘンチャード (Michael Henchard) とファーフレ (Donald Farfrae) の争いといった恋愛問題も、重要なプロットの一部である。しかしながら、この作品における人間関係の特異性は、主人公マイケル・ヘンチャードが妻子を連れて登場するという設定や、作品冒頭での妻子の競売という逸話が象徴するように、家族に関わる問題にある。にもかかわらず、「娘」エリザベス＝ジェーン (Elizabeth-Jane) に対する、ヘンチャードの「父親」としての役割という視点から、この作品が論じられることは希である。そこで本論では、従来閑却視されてきた、父親ヘンチャードと義理の「娘」エリザベス＝ジェーンの親子関係を中心として作品を分析していきたい。

I

「家族」及び「親と子」の問題は、十九世紀ヴィクトリア朝時代の小説において重要な位置を占めている。そこでは、親と子の絆の確認や自己認識としての家族の発見、或いは、逆に子供を束縛する親権の否定等、いずれにせよ、家長・父系を中心とする家族像が描かれている。この家族形態の根底を支えるものは、純然たる「種の保存」のための「生物的」繋がりというよりはむしろ、人間社会の最小単位である「家族」の保存のための繋がり、つまり「血縁」と呼ばれる繋がりである。同時に、社会の規範・秩序、道徳が、親と子の間に「法的」繋がりをも明確にさせ、更に、宗教性が親による子に対する絶対的拘束力を生み出し、家長としての父親を中心として、家庭内の主従関係が絶対化された伝統的な家族制度が確立されていくのである。そして、このような力関係は、MC においても幾つかの場面に認められ、プロットに関わる重要な機能を果している。作品冒頭における妻子の競売という行為は、ヘンチャードの家長としての常軌を逸脱した権力の行使であり、彼がエリザベス＝ジェーンの結婚に関してファーフレに2通の手紙を出すという行為も、子供に対する親の拘束力が絶対的であることを示すものである。また一方、作品の終盤に至り、彼女の実の父親であるニューソン (Richard Newson) が、長い空白の時を経ながらも、再び彼女を取り戻すのも、血縁関係が重視される家族制度の認識が作品の根底に存在するからなのである。

カスターブリッジの人々に対する傲慢で人を寄せつけない態度や、何よりも、妻子を競売にかけるという行為は、一見、ヘンチャードが人間関係を拒絶しているようにも見える。しかし、J・ヒリス・ミラー(J. Hills Miller)は、ヘンチャードの対人関係に関して、次のように述べている。

[Henchard] is driven by a passionate desire for full possession of some other person. This means that his life is a sequence of relationships....¹

ミラーの言葉にあるように、ヘンチャードは決して他の人間を拒絶しているのではなく、むしろ「熱烈に」繋がりを求めている。しかも、彼が求める他人との繋がりは、一度は自ら手放したにもかかわらず、皮肉にも家族を構成するためのものである。ヘンチャードは、妻であったスーザン(Susan Henchard)が娘を連れて現れると、家族として一緒に生活するために即座に「買い」戻そうとする。また、彼が、アメリカに移民しようとするファーフレを自分の元で働くように強く説得するのも、彼がまるで死んでしまった弟のように思えたからである。また、スーザンが亡くなってしまうと、ルセッタを妻にし、新たな家庭を築こうとするのである。作品終盤で語られる「スーザン、ファーフレ、ルセッタ、エリザベス＝ジェーン——みんな、次々と彼から去っていった、彼の過ちによって、或いは不運によって」という言葉は、彼が作品全体を通じて、家族——妻、弟、娘——を作り上げようとしたが、叶わなかった結果を表しているのではないだろうか。² 加えて、ヘンチャード以外の人物も、作品中で様々な「家族づくり」を行っている。例えば、スーザンは、競売で買い手となったニューソンと共に、貧しいながらも「自分たちの家を陽気で、きちんと整えるために、他の女性に負けないくらい良く働き、新しい家庭を築いていく(19)。彼女はニューソンが海で死んだと聞くと、再びヘンチャードの元へ戻るが、これも年頃になった娘のために家族が不可欠と感じたからである。或いは、ヘンチャードの昔の恋人であったルセッタが、母を失い、父と不和になったエリザベス＝ジェーンを自分の家に引き取るのも、三人で「家族」として暮らす準備をすることが、彼と結婚するのには都合が良いと考えたからである。このように、時に恋愛問題を内包しながら、この作品のほとんどの主たる登場人物たちは、各々の思惑を抱え、複雑に交錯した「家族づくり」の人間関係の中に拮据取られていくのである。

様々な思惑が入り乱れ、作品における家族づくりは複雑な様相を見せるのであるが、その中心に位置するヘンチャードとエリザベス＝ジェーンの父娘関係は、更に、歪められた事実、認識、感情によって、より複雑である。すなわち、次章以降において詳細に言及していくが、作品冒頭の父ヘンチャードとその娘エリザベス＝ジェーンという、事実においても認識においても一元的な親子関係から、事実を知らず自分の子供であると信じる父親と(母の再婚がもたらした)義理の父を慕う娘、実の親子であると説得する父とそれを受け入れ信じようとする娘、更に、事実を知り、血の繋がりのない、妻の連れ子という法律的養子関係を余儀なくされる父と、真実を歪められたまま、母の事情によって曖昧になっていた親子関係を正常化しようとする娘、という一層複雑な親子関係に巻き込まれていくのである。そして、留意すべき点は、家族づくりの営みにおける二人の視点には、絶えずずれが生じているということである。

こうした構図を生み出した要因を見ていく上で、草稿から最終原稿に至る過程における、ヘンチャード親子の設定に関する変更は注目すべきものである。ウインフィールド(Christine Winfield)によると、1884-5年段階の原稿においては、エリザベス＝ジェーンはヘンチャード

の実の娘であり、ニューソンの死は疑いないこととなっていたが、最終的なテキストにおいては、エリザベス＝ジェーンはニューソンの娘となり、しかも、ヘンチャードと暮らしている娘に会うためにニューソンは姿を現す。この変更に関して、ウインフィールドは次のように理由づけている。

...it is largely through Henchard's manipulation of the truth of Elizabeth Jane's parentage...that the tragic outcome of Newson's reappearance is determined.³

ニューソンの再登場が悲劇につながっていくのは、ヘンチャードがエリザベス＝ジェーンを手放したくないために、本当の親について嘘をついていたからである、とウインフィールドは述べている。つまり、上述した二つの変更は、「嘘」が暴露されたときの影響——エリザベス＝ジェーンの信頼を全く失ってしまうという結果——をより大きく、より強調するためであった、と彼女は説明している。しかし、これらの変更は、単にヘンチャードの悲劇性を強めているというよりは、むしろ悲劇をもたらす重要な要因そのものと言えるのではないだろうか。なぜならば、原稿が元のままであれば、少なくともヘンチャードがエリザベス＝ジェーンと行う家族づくりは、親子関係の正常化、という一元的視点で説明がついてしまうものだからである。にもかかわらず、こうした変更に伴い、前述したように多元的家族づくりが必要となり、とりわけ血縁関係における変更は、エリザベス＝ジェーンとヘンチャード親子の関わりをより一層複雑にする要因として介在し、二人の家族づくりを困難にしていくのである。

II

ヘンチャードにとってエリザベス＝ジェーンの名をもつ女性が二人いることは彼の「家族づくり」に大きな意味をもつ。実の娘であるエリザベス＝ジェーンは、幼い姿を我々に見せるだけで、一見、作品における意味は薄いように見える。しかし、彼女の存在は、彼に自分の血を分けた子供がいたという「事実」を残し、二人目のエリザベス＝ジェーンをヘンチャードの元へ運んでくる役割を果たしている。それゆえに、この事情——自分の娘であるエリザベス＝ジェーンは彼の元から離れるとすぐに病死してしまうが、すぐにスーザンとニューソンの間に子供が誕生し、娘を失って悲しむ母親によって同じ名前が付けられたということ——を知らされていないヘンチャードは、初対面の場面で、「スーザンの娘であるエリザベス＝ジェーン」という言葉を聞いて、彼女に対して父親としての愛情を感じ、涙すら浮かべるのである(52)。この時点ですでに父と娘の関係は、事実と認識の間で複雑な様相を生み出している。更に、ヘンチャードとスーザンの(再)結婚によって、父と娘には社会的・法的レベルでも新たな繋がりが付与され、この時点では、父と娘の家族づくりは、ヘンチャードにとっては、自分の短慮によって曖昧になっていた親子関係を正常化するものであり、エリザベス＝ジェーンから見れば、血の繋がりのない、義理の父との法的関係を確立させていくことであった。

自分の子供として何の疑念もなく、エリザベス＝ジェーンに対し、ますます愛情を深めていく彼は、独占欲から娘にヘンチャードという名字を名乗らせることを望む。しかし、真実を知るスーザンの行動によって実現しない(68)。そして、スーザンが亡くなってしまうと、このままエリザベス＝ジェーンが「父」について知らずにいることに耐えられなくなったヘンチャードは、とうとう彼女に自分こそが本当の父親であると告白し、更に父と信じていたニューソンを思って涙する彼女に対して「昔の彼(ニューソン)よりもおまえに優しくしよう！おまえの父

親として尊敬してさえくれれば、何だってしてやろう！」(94)と愛情を強要する。この時、必死に説得するヘンチャードと、その姿に心を打たれ、彼を信じることにしたエリザベス＝ジェーンは、共に失われていた愛情を取り戻そうとする親子関係の正常化という一元的視点に立っている。しかし、それはほんの一瞬のことであった。娘に告白したまさにその夜、彼は彼女が自分の娘ではないことを妻の遺書によって知ってしまう。すると彼女への好意は一転して「実の子ではない娘」に対する嫌悪へと変わり、義理の娘を排除し、新たな家族づくりを考え始める。この変化の契機は彼の「血の繋がり」に対する認識に呼応したものである。そして、彼の「血縁者」に固執する態度はヘンチャードのルセッタに対する感情にも変化を与えている。

His bitter disappointment at finding Elizabeth-Jane to be none of his, and himself a childless man, had left an emotional void in Henchard that he unconsciously craved to fill. (113)

彼はこれまでルセッタには過去の行為に対する義務感のみを感じていた。しかし、自分が子供のない男であるという激しい失望感と感情的空虚から、彼はルセッタに新たな関心をもつことになる。ヘンチャードが彼女を自分のものになりたいと切望するのは、一つには彼女と結婚することによって、再び自分の本当の子供がもてるかもしれないという希望からではないだろうか。それゆえ、ルセッタが独身の間、義理の娘は全く顧みられない。例えば、ルセッタを巡る、ヘンチャードとファーフレアの争いの中では娘の存在はほとんど完全に無視されているのである。

When Lucetta had pricked her finger they were as deeply concerned as if she were dying; when [Elizabeth-Jane] herself had been seriously sick or in danger they uttered a conventional word of sympathy at the news, and forgot all about it immediately. (137)

上記の引用部分だけでなく、エリザベス＝ジェーンが存在が父親を始めとして、それぞれの登場人物たちの思惑によって左右される様子は、作品全体に認めることができる。ルセッタは最初、ヘンチャードと会うためにエリザベス＝ジェーンを引き取るが、彼が娘を嫌って会いにこないと誤解すると彼女の存在を疎ましく思う。しかし、ファーフレアに心変わりをすると、今度はヘンチャードを寄せ付けないために彼女を利用しようとする。ニューソンはスーザンとの家庭がぎこちなくなると、母と娘から離れていくが、寂しくなると娘に会いにやって来る。こうしたエリザベス＝ジェーン存在の不安定さは、なぜ生じるのであろうか。

再び、ウインフィールドの指摘する原稿の変更注目してみたい。彼女によるとヘンチャードの父親としての親権やニューソンの生死に関する変更以前、ヘンチャード夫婦には二人の娘がいたことになっている。競売の後、夫婦が別れるとき、年上の娘はヘンチャードと共に残り、年下の娘はスーザンと共にニューソンの元へ行くことになっていた。つまり二人の娘はそれぞれに「ヘンチャードの娘」と「スーザンの娘」の役割をになっていたはずである。そうであるならば、この変更によって本来二人の人間に分けられるはずであった役割を、一人の人間が重ねもつことになった、ということも考えられるのではないだろうか。同時に、本来ならばエリザベスとジェーンという二人の名前が一つになった、エリザベス＝ジェーンというクリスチャンネームの特異性も、彼女のもつ二面性の表れとも考えることができるであろう。ヘンチャードの娘として、またニューソンの娘として、二人の役割を重ねもつことで、周りの人間が自分

の利害に応じて、都合よく彼女の「娘」としての立場を利用することを許し、彼女の存在は不安定になっているのではないだろうか。先に挙げた例では、ルセッタは「ヘンチャードの娘」としてのエリザベス＝ジェーンを利用しようとしており、ニューソンは自分の娘として、エリザベス＝ジェーンに対する権利を主張するのである。ではなぜ、エリザベス＝ジェーンはその存在を分裂されなくてはならなかったのだろうか。

Ⅲ

家族内におけるエリザベス＝ジェーンの立場、その存在意義を明確にするために、再度「父」と「娘」というテーマに注目する必要がある。伝統的家族制度の中で「娘」とは疎外された存在である、とリンダ・E・ブース(Lynda E. Boose)は指摘する。

To consider the daughter and father in relationship means juxtaposing the two figures most asymmetrically proportioned in terms of gender, age, authority, and cultural privilege.⁴

ブースによれば、娘と父親は、社会的性、年齢、権威、そして、文化的特権に関して最も不均衡な位置にある。娘が正当に評価されるためには、結婚し、息子の母親にならなくてはならない。なぜならば、息子をもたない単なる妻は、家の中では部外者であり、「性的対象」にすぎないからである。更に、結婚とは自分の家を出て、他家の人間になることであり、その相手次第では父の敵となる可能性すら秘めている、危険な存在でもある。⁵

MCという作品において、血縁者たる娘に対して、父親の関心の低さが最も顕著に示されている例が、ヘンチャードが妻と娘を競売にかけた場面での台詞である。「もし望むなら、彼女は娘('the girl')を連れ、彼女の道を進むだろう。私は道具('my tools')を持って、自分の道を進もう。」(下線筆者、8-9)このとき、彼の意識の中で「娘」は「草切り」('hay-knife')などと同レベルに道具化され、お金と引き換えに切り捨てられている。更に、非血縁者とわかった二人目の娘に対しても、彼は何の躊躇もなく、同じような扱いを繰り返している。家を出たいと申し出るエリザベス＝ジェーンに対して、「わずかな年金('allowance')だが、私はお前にやりたいと思う——私から独り立ちできるように——そして、私もお前からそうできるように」(109)と言う。今度は彼自身が金銭を払う立場ではあるが、お金で不要なものを遠ざけようとするヘンチャードの態度は明白である。

従来の批評においても二人の娘という概念はあまり重要視されていない。ヘンチャードの娘に関しては、R・マイルズ(Rosalind Miles)が「ウエセックスの女性」('The Women of Wessex')という論文の中で、言及こそしているが、作品中の重要性を指摘している批評は希なのではないだろうか。⁶ 又、義理の娘のエリザベス＝ジェーンに関して、概して、揺るぎない「自制心('self-discipline')」をもち、「謙虚('modest')」で、「知的な('intellectual')」女性であるとされながらも、『サタデイ・レビュー』(The Saturday Review)の様に 'Elizabeth-Jane is excellent, but rather more than a trifle dull....' と、魅力に乏しい人物であると評するものが多い。⁷ 確かに、ハーディの他のヒロインと比較すると、彼女は女性としては目立たない人物であるかもしれないが、⁸ 作品中で果たす役割は重要である。⁹

例えば、ヘンチャードからファーフレへと心変わりしていくルセッタを観察する、エリザベス＝ジェーンの鋭い洞察力は留意すべきである。彼女は、ルセッタの輝く瞳と紅潮した頬か

ら、彼女とファーフレの関係を読みとり、ひそかに会う二人の一举一動を心の中で追いつける。その姿は「明敏な、沈黙する魔女 ('discerning silent witch,' 132)」と表現されており、エリザベス＝ジェーンには予言者の能力があるように示唆されている。その他にも、彼女は作中で 'seer' 'prophet' 'sage' と例えられているが、何よりも彼女のこうした能力を明確に表現しているのが、「仮面を剥がす ('dropping the mask,' 164)」という言葉であろう。自分の過去の恋愛を、あたかも他人のことの様に話すルセッタに対し、それはあなたのことでしょ、とエリザベス＝ジェーンは明言する。彼女は過去を偽わろうとするルセッタの仮面を剥ぎ、真実を突きつける。不利な事実を隠蔽しようとする仮面、或いは、実際には存在しないものをあたかも存在するように見せかける仮面、彼女にはこのような仮面を「剥がす」機能がある。そして、この機能は父ヘンチャードに対しても発揮されるのである。つまり、親子関係の中で、彼が被っていた「絶対的の権威をもつ父親」の仮面を剥ぎ、新しい形の家族関係を生み出していくことになるのである。

ファーフレと結婚したルセッタの命が危なくなると、娘に対する感情において、ヘンチャードに決定的な変化が現れる。

Shorn one by one of all other interests, his life seemed centring on the personality of the stepdaughter whose presence but recently he could not endure. (221)

かくして、ヘンチャードにとって、エリザベス＝ジェーンは彼の人生の中心的位置を占めるようになっていくのである。更に、ルセッタが死んでしまった翌朝、隣室で疲れて眠る娘のために、いそいそと朝食を作る彼の姿は、まるで彼女の母親か妻の姿であり、父性は曖昧になっているように思われる。

In truth, a great change had come over him with regard to her, and he was developing the dream of a future lit by her filial presence, as though that way alone could happiness lie. (222)

まさにこの朝、彼女の実父ニューソンが訪ねて来たときには、彼女を失うことを恐れ、あたかもお気に入りのおもちゃを取り上げられまいとする「子供」のように嘘をつく。彼の中で、娘の存在感はますます大きくなり、彼は娘のために性格すら変えてしまうのである。

...the *solicitous timor* ["anxious fear"] of his love — the dependence upon Elizabeth's regard into which he had declined (or, in another sense, to which he had advanced) — denaturalized him. (233)

愛する娘への不安が彼の本性を奪ってしまうのであるが、そのような状態へ、彼は自ら進んでいくのである。そして、「今や、彼女はすべてにおいて自分のやり方を行っていた。行くも帰るも、売るも買うも、彼女の言葉が法であった」(31)と語られているように、義理の娘は父との関係において「女主人」としての立場を確立する。そして、親子の関係がこの段階に至り、「義父と娘 ('the stepfather and daughter,' 231)」という、娘を視点の中心に置いて並列した表現が初めて用いられている。

この様な生活の中で、血の繋がりの欠如という事実はもはや彼にとって何の意味ももたず、一家の「父親」として優位に立つ意志もない。この時点で、伝統的な家族形態に対する彼の執着を読み取ることはできない。一方、エリザベス＝ジェーンはヘンチャードの義理の娘ではあるが、その出生に関しては、スーザンとニューソンの関係が決して正式なものではなかったために、「法的には誰の子供でもない（'legally, nobody's child,' 235）」存在である。又、彼女と親密な関係をもつ人達が指摘するように、彼女はいつもいるべき「家」に恵まれていない。それにもかかわらず、彼女が義父との親子関係の中で、娘として本来の立場を越えた地位を確立したことは、伝統的な家族形態における「娘」の非存在を否定したことになるのではないだろうか。少なくとも、従来の家族形態は崩壊しており、認められない。彼らの関係は、家族制度の中の父親の存在を脱中心化させるという意味で、その内部においても、また、（血縁関係を凌ぐ養子関係の確立という意味で）伝統的な家族制度を支える社会秩序の曖昧化という、外的側面においても、逆転した家族の構図を作り上げているのである。

IV

ヘンチャードは義理の娘エリザベス＝ジェーンと共に、言わばアフリエイティブな親子関係——即ち血の繋がりをもたないが、妻の連れ子という法的に認められた親子関係——を確立させ、伝統的な家族制度における父親の絶対的支配と同様な権力を行使する立場にある。実際、作品中盤においては彼女を近づけないためにその力は使われていたのである。しかし、彼は 'not his own,' 'not belong to him,' など、絶えず、フィリエイティブな親子の関係を求めており、それが実現しないと悟ると、ニューソンの排除を始め、自分の都合の中に真実を隠蔽し、現実を歪め、「実の娘」(234)としてエリザベス＝ジェーンと親子関係を築くことに執着し、彼女を中心とした関係を生み出した。その一方で、彼女がファーフレと結婚しようとしていることに気づくと、ヘンチャードは彼女が彼の子供ではないという理由で、「ファーフレはおそらくエリザベス＝ジェーンを見捨てるであろう、そうすれば彼女は再び義理の父親のものになるだろう」(235)と考えている。このように、彼はエリザベス＝ジェーンの存在に関してすでに混乱しており、正常な思考力は失われているように思われる。このような交錯した思いが結局は彼を悲劇へと追いやる一因となっているのであるが、しかし、ヘンチャードの個人的な問題以上の要因が作品の根底にはあるのではないだろうか。

MCにおいて、母スーザンと二人のエリザベス＝ジェーンの絆の強さは明白に描写されている。作品の冒頭で、父親のヘンチャードは二人の家族を全く顧みないが、母は娘を抱き、楽しげに話しかけている。三章で登場する母と娘はしっかり手をつないでいる。この点に関してハーディがM・G・フォーセット (Millicent G. Fawcett) に宛てた次の手紙は注目すべきものであると思われる。

...the tendency of the women's vote will be to break up the present pernicious conventions in respect of manners, customs, religion, illegitimacy, the stereotyped household (that it must be the unit of society), *the father of a woman's child* (that it is anybody's business but the woman's own except in cases of disease or insanity)¹⁰ (Italics mine)

これはハーディが女性参政権について賛成の理由を記している手紙の一部であるが、ここで注

目したいのは、子供に対する父親と母親の關係に言及している下線部分である。「女性の子供としての父親」という記述から読み取れる親子の關係には、母と子の密接な關係と、父親は女性という媒介なしには子供と結びつくことができない存在であることが示されているのではないだろうか。勿論、問題となるのは、母親に対しては過剰な責任が求められるにもかかわらず、父親に対して求められるのは妻の子供に対しての保護という、不均衡さではあるが、逆を言えば、このことは父と子の関わりの曖昧さを明白にしているのである。この手紙を見る限りでは、ハーディは、概して伝統的家族制度に見られるような父親の絶対的力を実際に認めているとは言いがたいのではないだろうか。そして、MCに登場する二組の「父親と娘」の間にも絆の強さは見いだしがたいものであった。ヘンチャードはスーザンに告白されるまで、エリザベス＝ジェーンが自分の娘ではないことに気付かず、一方、ニューソンも、娘の意識の中で「父親の座」をヘンチャードに奪われていた。このような親子の關係が、換言すれば、父と娘の關係の希薄さこそが、MCという作品の悲劇の根底なのではないだろうか。MCで見られたこうした父性の曖昧さという問題は、小説、短編、詩と形式を変えながらも、ハーディにとって共通した問題である。例えば、「小さな時の翁」と呼ばれる子供(Little Father Time)に対するジュードの親権には疑問が残り(『日蔭者ジュード』)、又、テス(Tess Durbeyfield)は父親をもたない子供を育てている(『ダーバービル家のテス』(Tess of the d'Urbervilles))。或いは、「幻想を追う女」('An Imaginative Woman')という短編や、「彼女の死、そしてその後」('Her Death and After')という詩においても、妻の不十分な告白や妻のかつての恋人の嘘によって、残された子供の父親はいづれも実の父親であるにもかかわらず、「父親であること」に懷疑を抱き、子供を放棄してしまう。このように、家族の問題を描くとき、父親としてのアイデンティティーの欠如はハーディにとって繰り返し描くべきテーマでありえたのである。そして、こうした問題点は作品の最終場面において、語り手によって明確に取り上げられる。

ヘンチャードは、結婚式で拒絶され、エリザベス＝ジェーンと別れた後、妻子のせりを行った場所を訪れる。語り手は次の様に述べる。

It was an odd sequence that out of all this tampering with social law came that flower of Nature, Elizabeth. Part of his wish to wash his hands of life arose from his perception of its contrarious inconsistencies — of Nature's jaunty readiness to support unorthodox social principles. (243)

ここでは、彼女が生まれたことや、実父の元に戻ったことも含めて、現実の世界では社会の法より自然の采配が優位であることが示されている。

作品の終盤に至り、ニューソンの再登場と、エリザベス＝ジェーンとファーフレアの結婚、という過程を経て、ヘンチャードと娘の親子關係は崩れ、ニューソン、ファーフレア、エリザベス＝ジェーンによる新たな家族が築かれる。このときヘンチャードは、自らの短慮——彼女に自分が実の父親であると言った誤りを正せなかったこと、彼女をたずねて来たニューソンを追い返したこと——のために、父親としての地位を失っている。最後の望みを賭け、娘の結婚式に出掛けて行くが、結局和解は拒まれ、ヘンチャードは自分と娘の間にかなる絆も見いだすことができず、完全に「疎外」されてしまう。一方、エリザベス＝ジェーンはファーフレアと結婚することによって、「小説の終わりで、世俗的物質と愛する男性の両方を手にする」幸福な女性と評されるが、本当にそうであろうか。¹¹ヘンチャードとの決別は、同時に、彼女に

とって義父との関係において獲得していた「女主人」という「主」の立場から再び本来の「娘」として、「妻」としての「従」の立場へと戻っていくことを意味している。結婚式の準備のために、夫となるファーフレと、父ニューソンが、費用について話し合う間、彼女は一人窓辺で考えごとをしている。この三者の構図は彼女が再び家族における疎外される側の位置に戻ったことを象徴していると見ることができる。つまり、様々な過程を経ながらも、血縁関係にある父と娘、そして父も勧める求婚者という、最も伝統的な家族の構図が再構築されるのである。

しかしながら、父ニューソンは結婚式からわずか数日後に海が恋しくなり、カスターブリッジの街を、娘エリザベス＝ジェーンの元を再び離れていく。そして、残された二人の生活が描かれるのであるが、実際、ファーフレについてはほんの一言、言及されるだけで、作品は彼女の穏やかで、静かな人生に対する語りで綴じられる。このように、再構築された家族はその事実だけを記し、作品において何ら特別な意味はないように思われる。とするならば、この家族の再構築は、単にヘンチャードとエリザベス＝ジェーンの家系の崩壊や彼の喪失感を印象づけるためのものであり、作品における「家族づくり」という点においては、二人の逆転した家族の形態こそが意味のあるものなのではないだろうか。

注

1. J. Hillis Miller, *Thomas Hardy: Distance and Desire* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1970), p. 147.
2. Thomas Hardy, *The Life and Death of The Mayor of Casterbridge. A Story of a Man of Character* (New York: W.W. Norton, 1977), p. 226. 今後、このテキストからの引用は、引用文に続けて括弧に入れて頁数を示す。
多様な「家族づくり」の様相が、多くの批評において、主人公ヘンチャードと周りの人間たちの関わり合いに、『リア王』(King Lear)やギリシャ悲劇の構図をあてはめようとする一因となっているのではないだろうか。例えば、J・ピーターソン(John Paterson)はエリザベス＝ジェーンにコーデリア、ヘンチャードにリア王の役割を見だし、D・A・ダイク(D.A. Dike)はヘンチャードとファーフレを、オディプスとクレオンの関係に読み替えている。また、D・D・エドワーズ(Duane D. Edwards)はヘンチャードの行為が娘をいけにえに差し出したアガメンノンに似ていると評している。いずれも一義的には、作品冒頭でのヘンチャードによる妻子売りの行為における「罪と罰」の因果関係の有無を論じている批評ではあるが、共通しているのは親子関係に基づく人物のつながりの悲劇を読み取っている点である。
John Paterson, 'The Mayor of Casterbridge as Tragedy,' *Victorian Studies* III (December 1959), p. 157. D. A. Dike, 'A Modern Oedipus: The Mayor of Casterbridge,' *Essays in Criticism* 2 (April 1952), p. 169. Duane D. Edwards, 'The Mayor of Casterbridge as Aeschylean Tragedy,' *Studies in the Novel*, 4:4 (Winter 1972), pp. 608-9.
3. Christine Winfield, 'The Manuscript of Hardy's *Mayor of Casterbridge*,' *Papers of the Bibliographical Society of America* 67 (1973), p. 49.
4. Lynda E. Boose, 'The Father's House and the Daughter in It: The Structures of Western Culture's Daughter-Father Relationship,' *Daughter and Father* (London: The Johns Hopkins Press Ltd, 1989), p. 20.
5. ブースは論文の中で『ロミオとジュリエット』(Romeo and Juliet)を好例として挙げているが、MCにおいても、同様の父親の危惧が言及されている。ヘンチャードはすでに不仲になっていたファーフレとの交際、結婚を「やつはこの家の敵だ」と言って、エリザベス＝ジェーンに禁じるが(87)、彼女が自分の子供ではないとわかると、彼は再びファーフレに手紙を書きエリザベス＝ジェーンとの結婚するを邪魔する意志はないと伝える(104)。これは伝統的家庭における父と娘

の関係がMCにも顕著であることの一例と考えられる。

6. Rosalind Miles, 'The Women of Wessex', *The Novels of Thomas Hardy*, ed. by Anne Smith (London: Vision Press, 1979)
7. *The Saturday Review*, May 29, 1886.
8. 確かに、エリザベス＝ジェーンはハーディの他のヒロインと比較すると目立たない女性として描かれているようである。しかし、M・ウィリアムズ(Merryn Williams)が示す「新しい女性」('New woman')像に繋がる要素があるのではないだろうか。
'...she is emancipated in the sense that she lives away from her family, works (she is anxious not to be a financial burden), reads seriously and is a daring and brilliant thinker.'
これは『日蔭者ジュード』(*Jude the Obscure*)に登場するスー(Sue Bridehead)に対しての言及であるが、この人物像は、エリザベス＝ジェーンにもあてはまると言えるのではないだろうか。彼女の日常生活は、自らの教養のなさを恥じ、懸命に本を読み、父ヘンチャードから独立しているために、編み物をしながら一人暮らしをしている。
Merryn Williams, *Women in the English Novel, 1800-1900* (London: The Macmillan Press Ltd., 1984), p. 185.
9. 作品におけるエリザベス＝ジェーンの機能として、語り手としての役割も重要である。この点については、拙論「*The Mayor of Casterbridge*を語る高窓の少女」(*Phoenix* 38)参照。
10. Thomas Hardy, *The Collected Letters of Thomas Hardy* Vol. 3, (Oxford: Clarendon Press, 1982), p. 238, dated November 30th, 1906.
11. '...it is unwanted Elizabeth-Jane who... receives both worldly goods and the man she loves at the end of the novel.' D. A. Dike, pp. 173-4.